

日本現代詩大系

第八卷

壺井繁治、小野十三郎、澁谷定輔、木山捷平、
森山啓、林芙美子、河上肇、秋山清、許南麒、
アナキスト詩、プロレタリア詩、農民詩收録。

日本現代詩大系

第八卷

河出書房新社

日本現代詩大系 第八卷

編集

日夏耿之介

山宮 允

矢野峰人

三好達治

中野重治

大岡 信

昭和五十年四月二十五日印刷
昭和五十年四月三十日發行

編者 中野重治

發行者 中島隆之

印刷 中央精版

製本 中央精版

發行所 河出書房新社

東京都千代田區神田小川町三ノ六

電話(〇三)(二九二)(三七一一)

振替 東京二〇八〇二

目次

どんどこで歌ふ抄	根岸正吉・伊藤公敬	三
勞働・放浪・監獄より抄	後藤謙太郎	六
中濱哲遺稿集抄		二
アナキスト詩集抄	猪狩満直・碧靜江・局清(秋山清)	四
夢と白骨との接吻抄	遠地輝武	五
人間病患者抄	遠地輝武	三〇
白痴の夢抄	ドンザッキー	三
ダダイスト新吉の詩抄	高橋新吉	三
高橋新吉詩集抄		二
新吉詩抄抄	高橋新吉	六
雨　雲抄	高橋新吉	六

平戸廉吉詩集抄	谷
神原泰詩抄	七四
死刑宣告全	六
斷片抄	一四〇
萩原恭次郎詩集抄	一四八
夜から朝へ抄	一五〇
罰當りは生きてゐる抄	一五二
夜の機關車抄	一五五
檻褙の旗抄	一六〇
壺井繁治詩集全	一五五
果實抄	一八八
神のしもべいとなみたもうマリア病院抄	一八九
半分開いた窓抄	一九二
古き世界の上に抄	一九三
壺井繁治	一八八
壺井繁治	一八九
小野十三郎	一九二
小野十三郎	一九三

大 阪 全	小野十三郎	一五
二足獸の歌へる抄	松本淳三	三二
陀田勘助詩抄		二三
灰色の藁に下がる抄	渡部信義	二五
野原に叫ぶ抄	澁谷定輔	二九
星の音楽抄	野村吉哉	三一
三角形の太陽抄	野村吉哉	三三
歪める月抄	郡山弘史	三八
たんぽぽ抄	坂本遼	三八
泥抄	伊藤和	三二
野抄	木山捷平	三五
メクラとチンバ抄	木山捷平	三六
太陽へ送る手紙抄	佐野嶽夫	三八
土牆に描く抄	内野健兒	三九

カ	チ抄		内野健兒	二四二
南京蟲抄		内野健兒	二四三	
街の小民抄		平澤貞二郎	二四三	
翼抄		伊賀上茂	二四五	
學校詩集抄	有島盛三・神谷暢・小森盛・金井新作・三野混沌 森佐一・森竹夫・坂本遼・薄野寒雄		二四六	
蒼馬を見たり抄		林芙美子	二五三	
新興農民詩集抄		小須田城子	二五六	
一九二七年日本プロレタリア詩集抄	小林園夫・長谷川進		二五九	
一九二八年日本プロレタリア詩集抄	波立一・西澤隆二		二六五	
一九二九年日本プロレタリア詩集抄	高木進二・重政順平 上村實彦・宮木喜久雄・金炳旻・南莊造		二六九	
一九三一年日本プロレタリア詩集抄	ビー丸のK・今村桓夫 長澤佑		二七四	

一九三二年日本プロレタリア詩集抄……………	楳村浩・大道寺浩一	二七六
山之井諒・石井秀		
一九三二年プロレタリア詩集抄……………	橋本正一・中田清公	二八四
平澤貞二郎・杉沼秀七		
一九三四年詩集抄……………	上田忠男・内田博・古賀一久	二九〇
一九三五年詩集抄……………	木村好子・今野大力・後藤郁子	二九三
赤い銃火抄……………	今野大力	二九六
防衛抄……………	鈴木泰治	二九八
戦列抄……………	郡山弘史	二九九
ストライキ宣言抄……………	白須孝輔	三〇三
ナップ七人集抄……………	西澤隆二・窪川鶴次郎・上野壯夫・中野鈴子	三〇五
三好十郎詩抄……………		三二三
濕地の火抄……………	新島榮治	三二四
隣人抄……………	新島榮治	三二七

ビ	ラ抄	下川儀太郎	三九
中野重治詩集全			三〇
異邦人抄		植村諦	三五四
愛と憎しみの中で抄		植村諦	三五五
わが愛を闘いの中から抄		船方一	三五九
松ヶ鼻渡しを渡る抄		田木繁	三六三
機械詩集抄		田木繁	三六五
潮流抄		森山啓	三六六
故郷抄		伊藤信吉	三八〇
百万人の哄笑抄		坂井徳三	三八五
辛抱づよい者へ抄		松田解子	三九〇
こがね蟲抄		金子光晴	三九五
鱻沈む抄		金子光晴	三九七
鮫全		金子光晴	三九九

落下傘抄	金子光晴	四三
蛾抄	金子光晴	四五
鬼の兒の唄抄	金子光晴	四九
小熊秀雄詩集抄		四一
飛ぶ櫓抄	小熊秀雄	四五
流民詩集抄	小熊秀雄	四九
沙漠の歌抄	雷石楡	四八
思辨の苑抄	山之口貌	四二
山之口貌詩集抄		四四
九篇詩集抄	野川隆	四七五
たらちねのうた抄	金鐘漢	四七六
わたしは風に向つて歌う抄	江森盛彌	四七八
敘事詩集抄	赤木健介	四八一
旅人抄	河上肇	四八三

編 笠抄	ひろし・ぬやま	四八五
鉛筆詩抄	吉塚勤治	四九二
秋山清詩抄		四九四
倉橋顯吉詩集抄		四九七
朝鮮冬物語抄	許南麒	五〇〇
解 説	中野重治	五〇五
作者作品及び起句目次		五三

凡例

一 本巻に収載した詩書の多くは今日容易にそれを観ることができないため、能ふ限り原型を保存することに努めた。従つて抄出を餘儀なくされた詩書の目次はすべて各その冒頭に掲げ、収載作品の全貌を窺ふに便とし、序文・跋文も紙幅の許す限り採録した。

一 それぞれ文末に發行年月日・發行所名・判型・頁數・および定價を記して詩書の型態を推測するに便ならしめた。記載中菊半截判（五・九×四・六）等の表示の括弧内の數字は縦五寸九分横四寸六分の謂であり、序文・目次等の頁數が奇數で終つてゐるのは裏白を含むの意を示したものであり、上製・並製本の稱呼は前者はボール厚表紙本綴を、後者は紙裝薄表紙あるひはフランス裝等を表すものである。また序文・目次・本文等の頁數の記載の順序は各書の構成の次第による。

一 排次は原則として同一作者の下にその作者の詩書・詩篇を一括し、單行詩書の發行年代順に配例する方針をとつた。但し各作者排次の順は近代詩形成の史的發展を把へるやうの配慮の下に行つた。

一 収載した詩篇はすべて初校本を底本として用ひ、能ふ限り初出雜誌・流布本・全集本等をも参照したが、初校本保存の原則から單に字句においても行替や句讀點などの一般流布本と異なる箇處の若干は、すべて初校本に

従つたものである。

一 詩篇の若干について發表當時、檢閲その他の考慮から伏字を餘儀なくされたものは、現在保存されてゐる原稿に據り、或は作者に問合す等可能な限りの方法によつてこれが原型に戻すことに努力した。原型に覆した箇所はその横に＊印をもつて示した。但し原型に戻すこと不可能なる箇所は……、×××、或は□□□等により發表當時のままにした。

一 語法・用字などは作者の趣味や慣習によるので多少の混亂も整理せず、ただ漢字・假名づかひ・歐語の綴など印刷上の誤りと認められるものはこれを訂正した。

一 巻末に作者作品及び起句目次を附し索引に便した。作者・作品の排次は本巻出頭の順に従つた。

一 本書編纂の資料は主として衣等靜夫氏の藏書に據る。

第八卷 昭和期（二）

どんぞこで歌ふ

根岸正吉
伊藤公敬

目次

根岸正吉・赤い實 我は労働者よ 労働者よ 織工・大杉榮氏に呈す
― 孤立汝等を殺す 女よ 人の流れ マグネシヤの光 春雨
疲れて歸るその時に 夜業 落ちぬ血痕 齒車 汽笛 須賀爺
杵が飛んだ 笑はないで下さい 喧嘩 裝飾された機械 血の河
労働者 《鶏が鳴く》労働者大會 場外 いたちごっこ 犬よ猫
よ 麻酔された獅子 隔著 労働大使 《薔薇の棘》鸛鳥 神
の言葉 貧乏人の聲 收穫を忘れて 黒い活字 二つの目 御
国のために 青年 《醜い僕》醜い僕 我こそは悲しけれ 血！
伊藤公敬・波止場からす 波止場人足 吾等が日 戰捷祝賀 露國
革命 土掘りに ノートから 《工場哀歌》工場哀歌（二） 工場
哀歌（二） 日は照れり 月夜の悲哀 この一事 前提 わが胸
は 朝 放火犯 不思議な世界と人 子供の歌 泥酔吟 勞
働哀歌 空腹 悲しき玩具 税關 無題 太陽はまつ赤だ
雨 安價なる肥料 亡びざる二つの靈魂 貧民窟の悲哀 これが
事實だ 妻に破棄されたる詩の續篇 人間とは

序 〓 特異なる二個の人物 〓

此の集の著者根岸正吉君が私の家に遊びに來てゐる時、其

の姓名だけを云つて他の來客に紹介すると、其の來客は大抵、「ア、さうですか」と至極冷淡な、通り一通の挨拶をするが、「昔し『新社會』に詩を載せたN正吉といふのが此人です」と云ふと、「アツ、あなたがサウですか」と、忽ち其の挨拶が意氣込の違つた熱心な物になる。彼が工場生活の間から發したウメキ聲は、それほど深い印象と感銘とを我々のグループの多くに與へてゐるのだ。彼は其後少し健康を損じて、今は會社の事務員といふ平凡な職業に就いて、減多に詩も作らないやうだが、其代り彼は今、殆んど一身の全力を注いでマルクスの英譯本など讀んでゐる。彼が若し此次に新しい著作をする時があるなら、それは詩にしても、他の種類の文章にしても、必ずズット違つた物になるだらう。又著作以外、彼の言論行動は必ず大きな影を社會に投げるだらう。と私は信じてゐる。さういふ未來を持つてゐる彼の此の詩集は、單に工場生活のウメキ聲としてばかりでなく、一個の有力なる社會運動者の産聲として特殊の意義と趣味とを持つてゐるわけである。

此集の今一人の著者たる伊藤公敬君は私の直接知つてゐる人ではないが、横濱に於ける我々のグループでは久しい前からよく知られてゐる人である。彼は初め印刷工として指四本の肉税を拂ひ、後ち又、波止場人足として起重機の上

から落され、今では歩行の困難を忍んで労働してゐるといふ。彼の歌はさういふ生活の間から歌ひだされ、そして人さし指の残存してゐる部分と親指との不自由な働きに依つて書き現はされたものである。

私は詩歌において門外漢である。此の集の詩としての價值を云々し得る者ではない。唯だ我々のグループに於ける斯ういふ二個の人物を世間に紹介するの機會を得た事を大いなる光榮とする者である。

大正九年四月

電車ストライキ慘敗の報に接した日

堺 利彦

労働者よ

根岸 正吉

仕事著のはこりを拂ふ労働者よ。

汝の肺を潔むる術を知らざるか忘れしか。

あはれさよ。

汝の肺も然くけがれたるぞ。

油にまみれし手先を洗ふ労働者よ。

汝の濁れる血を如何にか潔むる。

あはれさよ。

汝の血も肉も然くけがれたるぞ。

労働者よ。

衣服は仕事著に替ふればよし。

されど、されど、

心せよ労働者。

汝の血肉は唯一つなるぞ、

汝一つなるぞ。

替ふべくもなし。

孤立汝等を殺す

花の下に集ひて遊ぶ幼子よ。

あの汽笛が憎くはないか？ 遊をやめるのが惜しくはない

か？

「ええ惜しいのよほんとに、でも叱られますもの」

人目を避けて煉瓦の蔭に

破れし戀を泣き交す少女子よ。

十五分！